

金古・庚申遺跡Ⅴ

— 移動通信用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2009

高崎市教育委員会

金古・庚申遺跡Ⅴ

— 移動通信用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2009

高崎市教育委員会

例 言

- 1 本書は、群馬県高崎市金古町908番地1に所在する 金古・庚申遺跡（第2次調査）（遺跡番号No.432）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名は、事務局との協議により、契約時での事業名は「金古・庚申遺跡（第2次調査）」であるが、庚申古墳群にて過去における旧森馬町の調査事例の順に従い、本遺跡は第5次調査の為、「金古・庚申遺跡V」とした。
調査事例及び文献は以下の通りである。
1次調査・・・「庚申d号古墳」1987
2次調査・・・「群馬県誌」（庚申B号古墳範囲確認調査）1990
3次調査・・・「町内遺跡Ⅱ」（庚申g号古墳）1994
4次調査・・・「庚申遺跡」1996
なお、昭和38年に群馬大学にて庚申B号古墳が調査されているが、当山の調査事例からは除いた。
- 3 調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ群馬支店の移動通信用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。
- 4 発掘調査から整理作業を経て、報告書刊行に至るまでの一連の作業は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ群馬支店の費用負担によって行われた。
- 5 発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導・監理のもと、有限会社高澤考古学研究所が実施した。現地調査及び遺構撮影は、澤田福宏が担当した。
- 6 発掘調査の期間は、平成20年12月15日から平成20年12月28日までの期間で実施した。調査面積は159.97㎡である。
- 7 本書の編集は、有限会社高澤考古学研究所の澤田福宏が行い、執筆は1を高崎市教育委員会の田口一郎が、それ以外を澤田福宏が担当した。
- 8 基準点測量は田中隆明に委託した。
- 9 遺構の平・断面図作成及びデジタル化は田中隆明・山際哲章に委託した。
- 10 遺物写真撮影は山際哲章に、空中写真撮影は加藤空樹にそれぞれ委託した。
- 11 発掘調査及び整理作業に従事した方は以下の通りである。（敬称略、50音順）
石神根三枝・澤田美枝子・澤山恵美・鈴木政江・友松幸・友松万平・友松すみ江・廣井基美
- 12 発掘調査から報告書刊行に至るまでに、下記の諸氏、機関に協力を賜った。（敬称略、50音順）
株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ群馬支店・澤山修・大明株式会社・田辺秀昭・高瀬敏昭・中里正豪・山下工業株式会社
- 13 発掘調査資料及び出土遺物は一括して高崎市教育委員会に保管してある。

凡 例

- 1 遺構断面中に使用した方位記号は南標北を、水準線は標高を示す。座標値は世界測地系（測地成果2000）を使用した。
- 2 土層注記及び観 察表の色調は、農林省農林水産技術会議事務局（財）日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
- 3 本書で使用した地図は、第1図が国土地理院発行数値地図1/25,000地形図を50%に縮小し、第2図及び第9図は国土地理院発行数値地図1/2,500（高崎市都市計画基本図）をそれぞれ編纂し使用した。
- 4 掲載図の縮尺は各図に示した通りである。
- 5 本書使用したテフラの記述は、以下の通りである。
As-C・・・3世紀後半～末 降下「浅面Cテフラ」
As-B・・・1108年（天仁元年）降下「浅面Bテフラ」
Hr-FA・・・6世紀初頭降下「鎌名二ツ房テフラ」
- 6 断面図中に表したスクリーントーンはAs-B軽石の堆積層である。
- 7 第8図の須恵器については断面を黒塗りて表現した。

目 次

例言・凡例・目次

I 調査に至る経緯	1
II 調査の方法と経過	1
III 遺跡の位置と環境	2
IV 基本体積土層	4
V 調査の成果	5
VI まとめ	8

挿図表目次

挿図・表目次

第 1 図 埴辺遺跡地図 (1/50,000)	3
第 2 図 遺跡の位置図 (1/2,500)	4
第 3 図 基本体積土層図	4
第 4 図 1、2号溝断面図 (1/60)	5
第 5 図 埴塚北立ち上がり断面図 (1/60)	5
第 6 図 埴塚ヘルト断面図 (1/60)	5
第 7 図 遺跡全体図 (1/100) 埴塚断面図 (1/80)	6
第 8 図 埴塚出土遺物 (1/2,1/3)	7
第 9 図 埴塚古墳群配置図 (1/5,000)	8
第 1 表 遺物観察表	7

写真目次

PL. 1 調査区遠景	PI. 3 1・2号溝セクション
調査区遠景	1・2号溝全景
PL. 2 調査区全景	埴塚遺物出土状況
調査区東壁セクション	埴塚全景
周堀セクション	As-C地層状況
周堀セクション	川十遺物
	作業風景
	埋め戻し状況

I 調査に至る経緯

平成20年7月、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ群馬支店（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に移動通信用無線基地局建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地周辺が古墳時代後期の群集墳である庚申古墳群であり赤生～中近世に至る散布地として遺跡台帳・地図に登録された埋蔵文化財包蔵地であるため、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年8月7日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年9月4日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳時代の遺構を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、文化財保護法第93条第1項の規定による届出に対する回答で、記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監視の下、有限会社高澤考古学研究所に委託して実施することとなり、平成20年12月12日付けで高崎市長・事業者・有限会社高澤考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成20年12月15日付けで事業者と有限会社高澤考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。

II 調査の方法と経過

1. 調査の方法

高崎市教育委員会による試掘調査の結果、遺構確認面は、Hr-FAの上面であることが確認されている為、重機により、約40cmある表土を除去し、Hr-FA面を検出した。その後、人力により遺構確認作業を行った。結果、2条の溝と、調査区東側に古墳の周堀と考えられる落ち込みを確認した。

検出された遺構は全て手作業にて、掘り下げ作業を行い、埋没状況・平面形を図化記録（デジタル）及び写真記録を成りながら調査を行った。

写真は35mmカラースライド、35mmモノクロ、デジタルカメラを併用し、必要に応じて4×5及び6×4.5カメラを使用した。空撮はラジコンヘリコプターにて垂直撮影、遠景撮影を行った。

調査終盤に調査区北西隅にて、土層観察用の深掘を行った。各層位にて遺構を確認しながら掘り下げたが、遺構・遺物は検出されなかった。

全ての発掘調査が終了した後、重機にて排土を調査区に戻し、転圧をしながら埋め戻し作業を行い、調査前の状態に戻した。

2. 調査の経過

12月15日 機材搬入、安全対策

12月16日 0.45㎡のバックホーにより、表土除去開始。遺構確認作業開始。

12月17日 遺構確認作業。1、2号溝及び周堀確認。

12月18日 1、2号溝掘り下げ作業及び、平面測量、全景撮影。

12月19日 周堀、掘り下げ作業。

12月22日 周堀、掘り下げ作業。

12月24日 周堀掘り下げ作業及び遺物出土状況撮影。ラジコンヘリコプターにて空撮。

12月25日 基本堆積土層の確認の為、深掘。

12月26日 遺跡全体平面図作成。基本堆積土層の撮影及び土層確認。

12月28日 0.45㎡のバックホーにて、埋め戻し作業。機材搬出。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

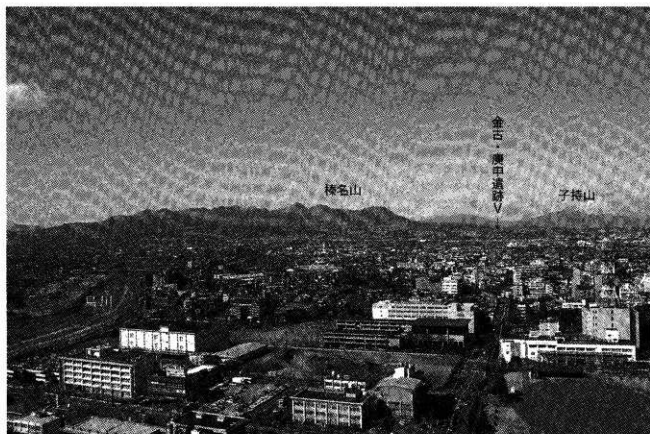
1. 遺跡の位置と周辺の地形

本遺跡は、地方主要道前橋貫舞線と鉄道水沢群馬線の交差点「フランスの町」から北東に約 200 m の地点にあり、「日本絹の里」入り口のすぐ北側に位置する。標高は約 200 m である。西側約 300 m には染谷川が流れており、遺跡はこの左岸高地上にある。

本遺跡のある旧群馬町地域は、榛名山（標高 1,448 m）東南麓にあり、北西から南東方向へ緩傾斜する山体崩落により形成された広大な相馬ヶ原扇状地地上にある。扇頂は榛束村上野原の山麓付近で、標高は約 600 m、扇端は標高 110 m の等高線上である。この広大な扇状地は標高約 150 m 付近を境に地形的に大きく変化する。標高 150 m 以上の地域は、平均斜度が約 4 度と勾配がやや急で、標高 150 m 以下の地域は、平均斜度が約 2 度となり、高所に比べると傾斜はかなり緩やかになる。この勾配が違ふ 2 地域が接する傾斜変換線付近の標高約 150 m 付近では、各所に扇状地特有の伏流水による湧水がみられる。湧水は標高約 270 m 付近でもみられ、本地域を流れる河川の水源にもなっている。そして、標高 110 m 前後の大八木町、正観寺町付近にて前橋台地へとつながっていく。

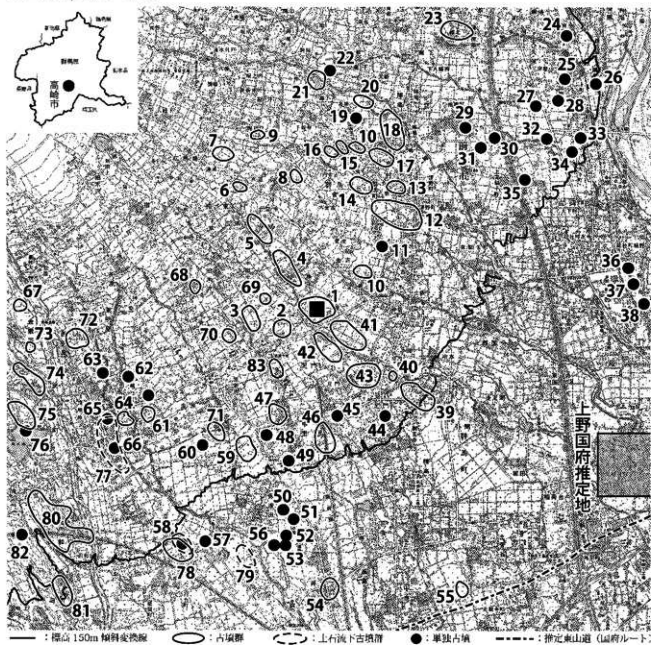
本地域を流れる河川は、八幡川、牛池川、染谷川、天王川、唐沢川、井野川である。これらの各河川は、傾斜がやや急な高所地域では、比較的流路は蛇行せず、放射状に流れ、開析もあまり進まず、谷も浅い。しかし、傾斜変換線付近以下では、流路変換地域となり、谷の幅も広く、現地表と河床との高低差も数 m にも及ぶ場所がある。蛇行も強くなり、暴れ川であった様子がいたる所で見られる。

このように本地域の地形は、標高 150 m を境に平均斜度が約 4 度の A 地域、平均斜度が約 2 度の B 地域、そして標高約 110 m 以下の前橋台地となる C 地域の大きく 3 つに分かれることがわかる。遺跡の分布も地形の特徴に大きく左右される状況で検出されている。弥生時代までは傾斜変換線より高所の A 地域では遺跡は極端に少なく、多くはそれ以下の B から C 地域に分布している。古墳時代になると、A 地域に古墳群が形成され始め、集落はそれ以下の地域に分布し、墓域と生活域の地域分けが明確になる。そして、古墳時代以降、徐々に A 地域も開発され、遺跡数が増えていく。律令期に国分寺がおかれたのも当該地域で、建立時の詔には「必ず好處を預んで」とあるように、当時から自然環境がよく、生産・生活・交通向にも優れた地域であったものと考えられる。



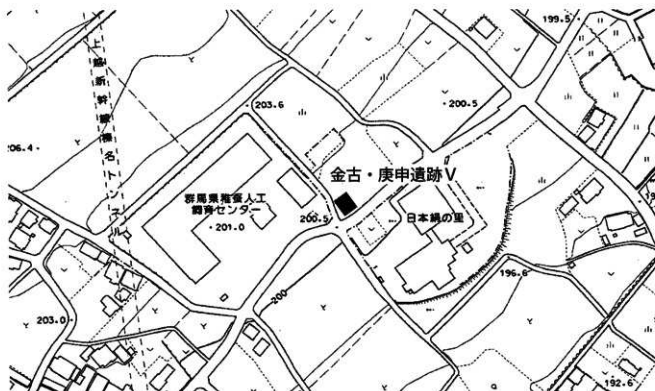
高崎市庁舎からの遠景写真

2. 周辺遺跡と本遺跡



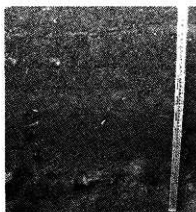
1. 金古・庚申遺跡Ⅴ(庚申古墳群) 2. 金井沢古墳群 3. 下ノ原古墳群 4. 工塚古墳群 5. 金井古墳群 6. 方町山古墳群
7. 下ノ前古墳群 8. 宮室古墳群 9. 堂塚古墳群 10. 諏訪古墳群 11. 金古愛宕山古墳 12. 橋向・内林古墳群 13. 判塚古墳群
14. 内命古墳群 15. 榊ノ木取古墳群 16. 立舂古墳群 17. 北原古墳群 18. 長久保古墳群 19. 高塚古墳 20. 糠子古墳群
21. 今井古墳群 22. 庚申塚古墳 23. 南下古墳群 24. 茶ノ木古墳 25. 三津屋古墳 26. 川原田古墳 27. 十二古墳
28. 渾平山古墳 29. 清里3号古墳 30. 青梨子古墳 31. 池端古墳 32. 大松古墳 33. 大町古墳 34. 沼古墳 35. 清里8号古墳
36. 二子山古墳 37. 愛宕山古墳 38. 宝塔山古墳 39. 北修保古墳群 40. 東久保古墳群 41. 如來古墳群 42. 寺屋敷古墳群
43. 綿巻古墳群 44. 観音寺古墳 45. 薬師堂古墳 46. 毘沙門古墳群 47. 尾端古墳群 48. 浅間塚古墳 49. 大塚山古墳
50. 薬師塚古墳 51. 八幡塚古墳 52. 保渡田遺跡 53. 三子山古墳 54. 井山古墳群 55. 菅谷古墳群 56. 北畑遺跡
57. 愛宕塚古墳 58. 下芝谷ツ古墳 59. 海行塚古墳群 60. 巖盛塚古墳 61. 本山古墳群 62. 行人塚古墳 63. 佛山古墳
64. 天宮古墳 65. 上芝古墳 66. 四ツ谷古墳 67. 長者久保古墳群 68. 新築敷古墳群 69. 下ノ原Ⅱ古墳群 70. 東谷古墳群
71. 善龍寺前古墳群 72. 箕輪城下層古墳群 73. 街道東古墳群 74. 嵐山古墳群 75. 鴨入古墳群 76. 京塚古墳
77. 上芝古墳群 78. 谷ツ古墳群 79. 谷津古墳群 80. 和山山古墳群 81. 白川古墳群 82. 白川笹塚遺跡 83. 足門村西古墳群

第1図 周辺遺跡図 1/50,000



第2図 遺跡位置図 1/2500

IV 基本堆積土層



耕作土	
I	FA
II	C混
III	C混
IV	暗褐色
V	黒褐色
VI	暗褐色
VII	黄褐色

- I 明黄褐色土 Hue10YR 6/6 粘性弱・しまり有 Hr-FA 主体 部分的に黒色土をブロック状に含む 本層上面が遺構確認面
 II 黒褐色土 Hue10YR3/1 粘性普通・しまり有 As-C 軽石を多く含み、部分的に非常に密度の高いAs-C 軽石が堆積している
 III 黒褐色土 Hue10YR 2/2 粘性普通・しまり有 II層に比べAs-C 軽石の含有が少ない
 IV 暗褐色土 Hue10YR 3/3 粘性普通・しまり有 As-C 軽石は認めない。少量の黄色軽石を含み、ムラなく均一な堆積をしている
 V 褐色土 Hue10YR 3/2 粘性普通・しまり有 IV層とほぼ同じだが、黒色化がすすんでいる
 VI 暗褐色土 Hue10YR 3/4 粘性強・しまり有 5から30cm大の円礫主体、ややシルト質
 VII 黄褐色土 Hue10YR 5/6 粘性強・硬くしまる・シルト質 礫の混入は少くなる

写真・第3図 基本堆積柱状図

遺構確認面は Hr-FA 堆積層である I 層上面で、FA 面を掘り込んだ遺構の確認を行った。I 層は遺跡全体に堆積しており、地形は北西から南東に向かい緩やかに傾斜している。II 層中で部分的に I 次堆積に近い As-C 軽石の堆積が見られるが (PL-3: As-C 堆積状況参照)、本来の I 次堆積層が後世の攪拌 (動植物等による) により、上下の土壌が混入した結果、このような堆積をなしているものと考えられる。III 層になると As-C 軽石の含有は少なくなる。IV-V 層には As-C 軽石は含まれず、非常に均一な堆積をしている。VI 層の礫は、山体崩落による堆積物と考えられ、大小の礫が約 30 ~ 50cm の厚さで堆積している。

V 調査の成果

1. 検出された遺構

(1) 1号溝

規模は全長約7.5m、幅約40cm、残存深度約15～30cmで、北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。調査区内での高低差は約30cmである。中央部付近で2号溝と交わるが上層の堆積状況及び、平面での新旧関係の確認により1号溝が新しいと考えられる。全体的に顕著な流水の痕跡は確認できなかったが、東側セクション面にて、下部に若干のラミナ状堆積が認められた為、北西から南東への流水があったと考えられる。出土遺物が無い為、詳細な時期は不明であるが、As-B堆積層を掘り込んでいる為、おおむね中世以降のものと考えられる。

(2) 2号溝

規模は全長約4m、幅約30cm、残存深度約5～12cmで、1号溝同様に北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。調査区内での高低差は約10cmである。北側で1号溝と交わるが確認状況により、本遺構の方が古いと考えられる。遺物の出土が無い為、詳細な時期は不明だが、1号溝同様As-B堆積層を掘り込んでいる為、おおむね中世以降のものと考えられる。

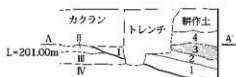


第4図 1・2号溝断面図

(3) 周堀

調査区中央付近から東側全域で確認できた。平面形は不定形ではあるが僅かに隅丸方形をしている。確認面では、Hr-FAを掘り込み、As-B軽石がほぼ全面を覆っていた。底面は全体的に平坦という状況ではなく、一部分を尾根状に掘り残し凹んでいる。遺物は、覆土中より極少量の須恵器片・埴輪片・川原石が出土している。出土遺物の内、No.1, 5, 6, 7は6世紀後半代で、No.2, 3, 4は7世紀後半代のものと考えられる。No.2の須恵器は底部内調整にて、回転へら削りが施されており、杯Gに分類される。埋没状況は、覆土堆積状況等から自然埋没である。覆土上層にてAs-B軽石の純層が厚く堆積している為、1108年の時点では周堀としてわずかに窪んでおり、その後徐々に埋没し平坦になっていったものと考えられる。以上のように本遺構からは二時期の遺物が出土しているが、平面形態が不定形であること及び周堀の古墳の特徴等から考えて、終末期古墳の周堀の一部で時期は7世紀後半代のものであると推測される。

今回の調査は部分的な確認の為、その全体は不明であるが、調査区外東側には庚申古墳群と同時期の横穴式石室を持つ7世紀後半代の円墳が存在していたものと推測され、本遺構は庚申古墳群中の新たな古墳として捉えることができると考えられる。



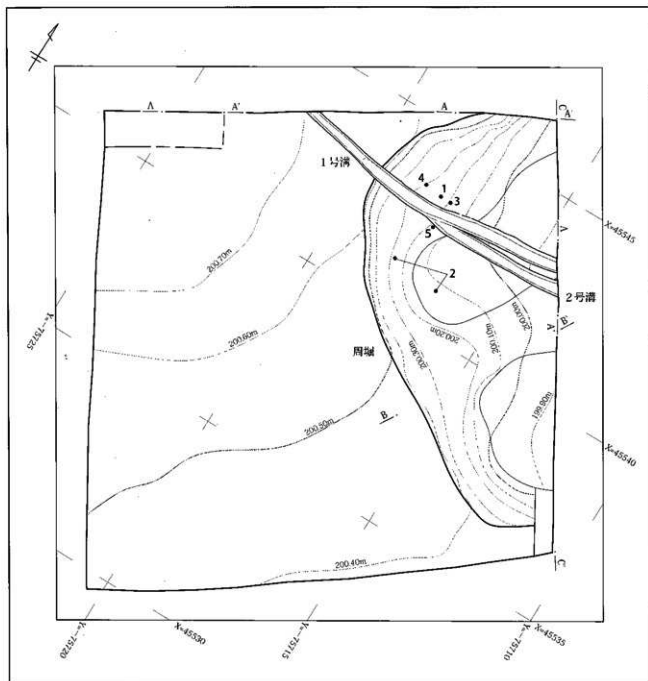
第5図 周堀北側立ち上がり断面図



第6図 周堀ベルト断面図

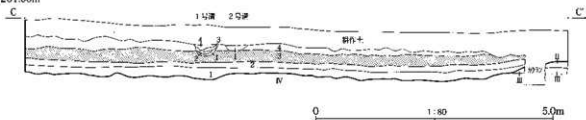
周堀

1. 黒褐色 Hue 10YR 2/2 粘性普通・しまり有 As-C粒を多く含む、Hr-FAブロックを少含む
2. 黒色 Hue 10YR 2/2 粘性普通・しまり有 As-C粒を少量含む
3. As-B純層 (PL-2:周堀セクション (As-B堆積) 参照)
4. 黒褐色 Hue 10YR 2/3 粘性弱・しまりやや弱 As-B粒を多く含む、1～3mmの白色軽石を少量含む
5. 暗褐色 Hue 10YR 3/3 粘性弱・しまり有 As-C粒を多く含むFAブロックを少含む



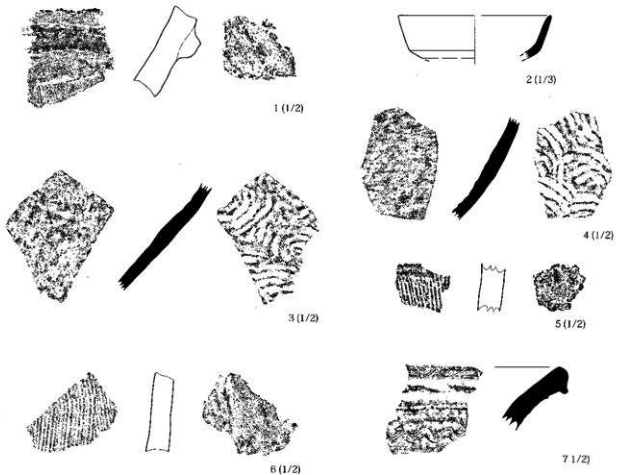
0 1:100 5.0m

L=201.00m



第7图 道跡全体図周城断面图

2. 出土遺物



第8図 周堀出土遺物

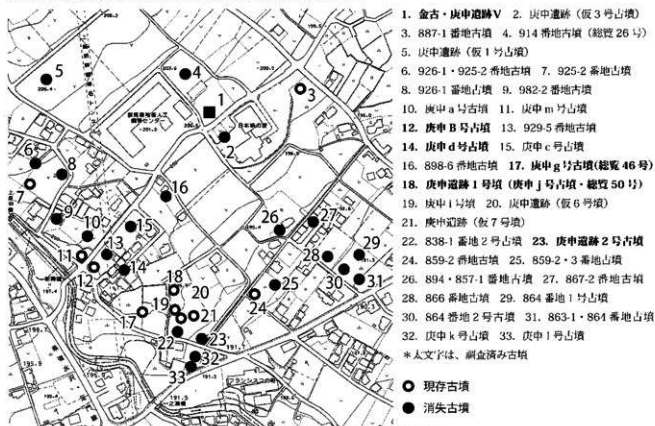
第1表 遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土位置	色調	胎上	特徴
1	埴輪	朝顔もしくは は形象	周堀 As-B 下層	にぶい赤褐色	石英・黒色粒 角閃石	台形突帯
2	須恵器	杯	周堀 As-B 下層	灰色	白色粒	轆轤整形 外面底部再調整で回転ヘラ削り
3	須恵器	葉	周堀 As-B 下層	灰色	白色粒	外面ナデ・内面青海波状アテ目
4	須恵器	葉	周堀 As-B 下層	灰色	白色粒	外面ナデ・内面青海波状アテ目
5	埴輪	円筒	周堀 As-B 下層	にぶい赤褐色	石英・黒色粒 角閃石	外面ハケ目・内面ナデ
6	埴輪	円筒	周堀 As-B 上層	にぶい赤褐色	石英・黒色鉱物	外面ハケ目・内面ナデ
7	須恵器	葉	周堀 As-B 上層	灰色	白色粒	頸部外面波状文・内面横ナデ 口唇部凸状に引き出す

VI まとめ

群馬県下で昭和10年に一斉に古墳の分布調査が行われ、その成果が「上毛古墳総覧」に集約されている。庚申古墳群はこの総覧によると計31基の古墳が確認されている。昭和60年に庚申古墳群の古墳の分布調査が行われ(文献4)、その時点で確認できる古墳は計29基であった。また、「上毛古墳総覧」に掲載漏れのもの6基あり、庚申古墳群は最低でも37基以上の古墳からなっていたものと推測された。平成6年には、群馬県県産人工工料センター建設に伴い、当該地域周辺が広域に調査された(文献8)。その時、新たに4基の円墳が確認され、昭和10年の分布調査以前にすでに削平され、確認出来なかった古墳の存在が明らかとなった。同時に発掘調査により、それまで古墳として考えられていたが、周辺に散乱していた石の集積及び、地山の高まり等で、古墳ではないと判断したものが3基確認できた。その後、試掘調査及び発掘調査の結果、本遺跡の調査が実施された平成20年までの古墳総数は、今回調査した1基を追加し、総数33基に及ぶこととなった。今回改めて現存する古墳の状況を確認したが、古墳としての高まり及び古墳構築石材の露出等、古墳として認識できたものは10基のみであった。現況は以下の通りである。No.3・7・11・18・19・20・21・24は畑で、このうちNo.3は石室がむき出しだが残存は良好である。No.12は庚申B号古墳で石室は現存している。No.17は庚申g号古墳で墳丘が非常に良好な状態で残存している。

今回、調査を行った金古・庚申遺跡Vは、現況では古墳が確認できなかったが、発掘調査を実施することにより、発見された新たな古墳である。古墳群中の古墳の分布は、第9図でも分かるように染谷川左岸微高地上から地方主要道前橋・箕郷線の北側地域においてL字状に分布密度が非常に高く、北東へ行くに従い徐々に少なくなる傾向がある。本古墳は古墳群北東部にあり、古墳が密集する場所というより点在する区域にあたる。しかし、このような密度の薄い区域においても周囲には、まだ未確認の古墳が存在することが十分考えられる。また、表土中と周囲の覆土から、埴輪片が極少量出土している。庚申古墳群は、これまでの調査の結果、截石切廻積の横穴式石室を持つ庚申B号古墳(No.12)や、横穴式石室の庚申d号古墳(No.14)、庚申遺跡2号古墳(No.23)など、おおむね7世紀～8世紀前半に造営された古墳群であることが分かっている。今回の調査で、埴輪片が確認されたことは大きな成果であり、古墳群(群集墳)の形成が6世紀後半まで遡る可能性が少なからずがあると考えられる為、今後の発掘調査及び継続的な研究が行われることをここで期待したい。



第9図 庚申古墳群配置図 (1/5,000)

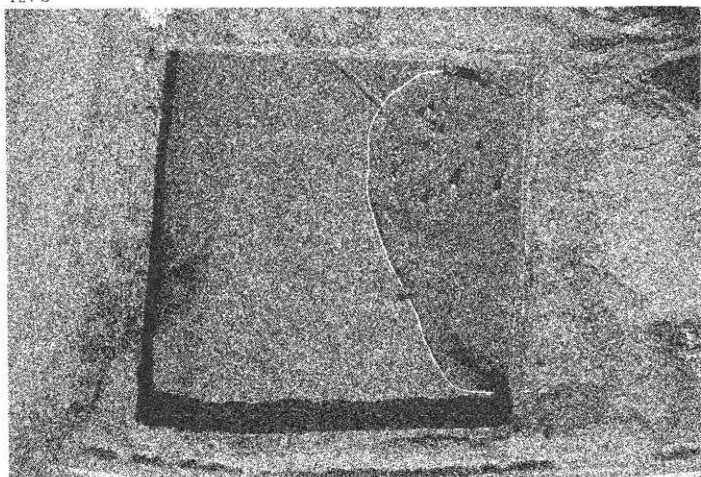
写 真 图 版



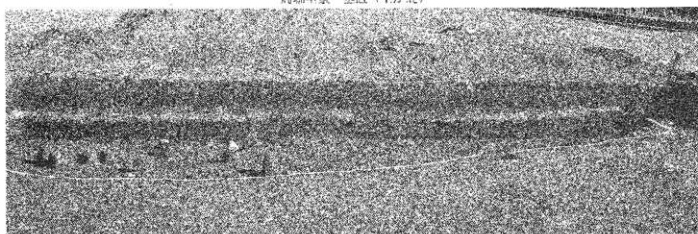
調査区遺址 南から (背景は榛名山)



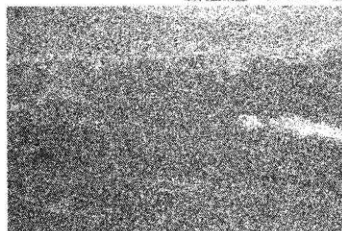
調査区遺址 北から



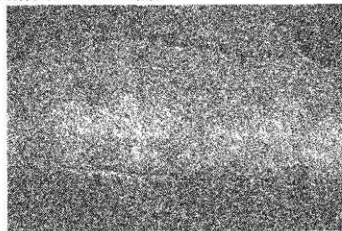
周堀全概 垂直（上か北）



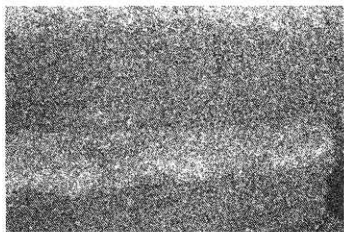
調査区東壁 セクション（白く堆積しているのがAs-B軽石）



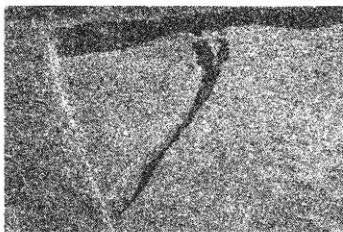
周堀セクション



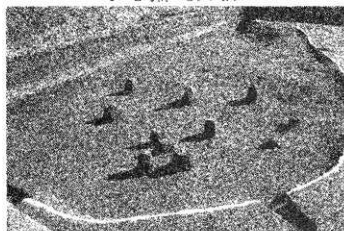
周堀セクション（As-B軽石堆積状況）



1・2号溝 セクション



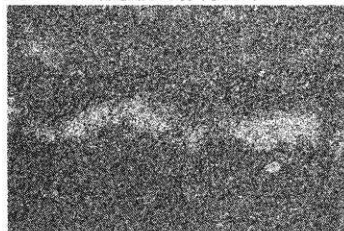
1・2号溝 全長(西から)



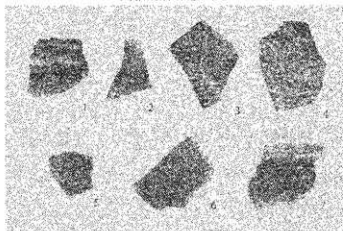
塚地遺物出土状況(北西から)



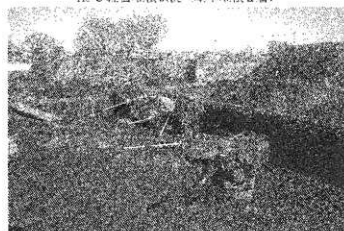
塚地全長(北から)



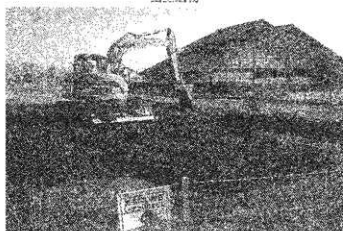
As-C 軽石堆積状況(基本堆積II編)



出土遺物



作業風景



埋め戻し状況

抄 録

フリカナ	カネココウシンイセキゴ
書名	金古・庚申遺跡 V
副書名	移動通信用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第240集
編著者名	高崎市教育委員会 田川一郎 有限会社 高澤考古学研究所 澤田福宏
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1 電話027-321-1111(代)
発行年月日	2009年3月31日

所収遺跡名	金古・庚申遺跡V					
所収遺跡所在地	群馬県高崎市金古町908番地1					
市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査開始	調査終了	調査面積 調査原因
102020	432	36°24'27"	137°39'21"	20081215	20081228	159.97㎡ 鉄塔建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金古・庚申遺跡V	古墳	古墳時代	周堀	須恵器 埴輪	
	その他	中世以降	溝		

参考文献

1. 松本浩一 群馬県史 資料編3 「庚申B号古墳」 1981
2. 「群馬町の遺跡」 群馬町教育委員会 1986
3. 若狭 徹 「庚申d号古墳」 群馬町埋蔵文化財調査報告書第20集 1987
4. 飛田野正作・須田まさえ・時枝 務 「東国史論」 庚申古墳群とその周辺 1987
5. 「町内遺跡Ⅱ」(庚申g号古墳) 群馬町埋蔵文化財調査報告書第36集 1994
6. 清水 豊・田辺 芳昭・納真 綾子 「庚申遺跡」 群馬町埋蔵文化財調査報告書第43集 1996
7. 群馬町誌 資料編Ⅰ 原始古代 中世 1998
8. 高崎市史 新編 高崎市史 資料編Ⅰ 原始古代Ⅰ 1999

— 金古・庚申遺跡 V —

高崎市文化財調査報告書第 240 集

平成 21 年 3 月 25 日 印刷

平成 21 年 3 月 25 日 発行

編集・発行 高崎市教育委員会

印刷・製本 細谷印刷有限公司